

第2章 湯前町の維持向上すべき歴史的風致

本町の東側には市房山がそびえ、麓の「市房山神宮里宮神社」とあわせて人々の信仰の対象となっている。



湯前町から見た市房山



市房山神宮本宮参道（水上村）

また、「明導寺阿弥陀堂（城泉寺）」をはじめ、「八勝寺阿弥陀堂」や「御大師堂」など中世の趣を今に伝える古社寺建築が残されており、町内に所在する社寺堂宇といったものもあわせ、地域一体となった神仏信仰の中で、独特の祭儀や、神幸式、伝統芸能などさまざまな伝統行事が行われている。

また、古くから営まれてきた米作りから形成された醸造産業も本町には欠かせないものとなっており、これらの伝統的な人々の活動と建造物などが、まちなみとして一体となって現在まで受け継がれることにより、本町の歴史的風致として形成されている。

本町における維持向上すべき歴史的風致は、大別して「里宮神社の祭礼行事にみる歴史的風致」、「相良三十三観音巡りにみる歴史的風致」、「幸野溝と球磨焼酎にみる歴史的風致」の3つに分類することができる。

里宮神社の祭礼行事にみる歴史的風致

市房山神宮里宮神社は湯前城跡に建つ神社で、創建は昭和 9 年（1934）であるが、由緒は 16 世紀に遡（さかのぼ）り、歴代の相良家当主をはじめ、領民からひろく信仰を集め、春と秋の大祭をはじめとする祭礼行事が行われている。

こうした祭礼行事では、町内を神輿が練り歩き、球磨神楽や白太鼓踊り、棒踊りといった伝統芸能が奉納されている。町内各地で行われている社寺堂宇に関する祭礼行事の中でも、春秋に開催される祭礼は人びとの心のよりどころとして地域に欠かせない存在となっている。

相良三十三観音巡りにみる歴史的風致

相良三十三観音巡りは、江戸時代にはじまったと伝えられる巡礼で、球磨地域にある 33 箇所の霊場では、春と秋の彼岸に全札所のご開帳が行われる。

このうち、本町には 3 箇所の札所があり、ご開帳の折には、地域住民は「お接待」で参拝者をもてなし、参拝者は白衣姿で「御詠歌」（ごえいか）を詠む。こうした光景は、球磨地域に本格的な季節（春と秋）の訪れを告げるものとして、その情趣を今に伝える。

また、地域住民は札所の管理に長年携わっているほか、住民相互に他の札所を訪れるなどしており、札所は地域と人々の交流を深める場となっている。

幸野溝と球磨焼酎にみる歴史的風致

幸野溝は、江戸時代の新田開発に伴って開削されたもので、水害による堰の流失など難工事の末、宝永 2 年（1705）に完成したかんがい施設である。

現在でも、かんがい施設としての利用はもとより、火災の際の水利等としても地域の要となっているほか、受益地では地区毎に農業に関わる祭事等を行う光景を見ることができる。

こうしたかんがい施設の整備で興隆したのが、米を原料とした「球磨焼酎」の醸造であり、球磨焼酎は、今日でも地域の祭礼行事をはじめ、球磨地域における生活の様々な場面で欠かせないものとなっている。

1. 里宮神社の祭礼行事にみる歴史的風致

・ はじめに

『球磨郡神社記』によると、市房山神宮里宮神社は、古来より市房山を御神体として信仰していた市房山神宮の別当寺として、現在の水上村に建てられた普門寺を起源にもつ。

普門寺は、江戸時代に中世城の湯前城跡に再興され、歴代の人吉藩主から領民まで身分の別なく市房山に参詣する「お嶽さん参り」が盛んとなってから、大いに賑わいを見せていた。

江戸時代には隆盛を迎えていた普門寺だが、神仏分離により明治時代に里宮神社の遥拝所（ようはいじょ）だけが残され、明治16年（1883）の火災による焼失を経た後、昭和9年（1934）、市房山神宮里宮神社として地元の寄付等により再建している。

現在は「里宮さん」の愛称で親しまれ、本町の総氏神的存在となっており、市房山神宮里宮神社では、多くの祭礼行事が行われ、その中で最も賑わうのが春祭り（五穀豊穰祈願祭）と秋祭り（五穀豊穰感謝祭）となっている。

（1）市房山神宮里宮神社の由来

市房山神宮里宮神社は、町内の下城地区にある湯前城跡に建つ神社で、創建は昭和9年（1934）であるが、その由緒は16世紀に遡り、市房山信仰は市房山を御神体とする山岳信仰で、大同2年（807）年に創建された水上村に位置する山中の本宮、山麓の一の宮神社（中宮）に加え、本町に位置する里宮神社（下宮）の3社で構成されている。



市房山神宮本宮（水上村）



市房山神宮一の宮神社（水上村）



市房山神宮里宮神社（拝殿）



市房山神宮里宮神社（本殿）

市房山神宮は、古来より「市房大権現」として信仰の対象となっており、熊本では北の阿蘇山信仰と並んで修験道が盛んに行われていた。

普門寺は、『球磨郡神社記』によると、当初は修験道場として湯山に所在していたが、永正3年（1511）、別当寺として岩野（現在の水上村）に建立された。

天正10年（1582）に5世住僧盛誉（せいよ）が、相良家に対し謀反を起こそうとしているという無実の罪を着せられて殺害され、寺は焼失した。

その後、慶長9年（1604）に僧頼真（らいしん）によって、普門寺は現在の湯前城跡に再興され、相良氏は岩野の普門寺跡に生善院（しょうぜんいん）を建立。盛誉らを供養している。

江戸時代を通じて、藩主の相良氏は普門寺を厚く保護し、藩民には3月15日の市房山神宮参詣とともに、毎年3月16日に生善院と普門寺参詣を行うよう命じ、自身もこれを実行した。この参詣は大変賑やかに行われ、市房山神宮は縁結びの神様「お嶽さん」としてひろく親しまれるようになり、普門寺や生善院と共に参詣する「お嶽さん参り」も盛んに行われた。

普門寺はこうした藩主による保護もあり、球磨郡内の寺院では最高となる460石を給され、寛文元年（1661）には人吉藩第2代藩主相良頼寛が江戸への参勤途上、普門寺に滞在している。

市房山神宮本宮は、市房山の4合目に位置しているが、山の険しさと相まって、遠方から徒歩で参拝することが非常に困難であったことから、普門寺に市房山神宮の遥拝所が設けられ、このことにより人々の参拝が容易となった。



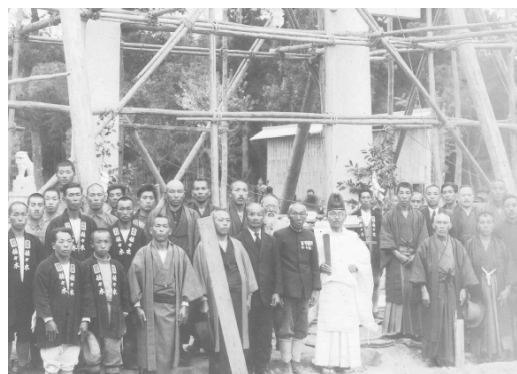
『球磨絵図』にみる普門寺周辺（人吉市教育委員会蔵）

明治5年（1872）、普門寺の廃寺により残った遙拝所が明治16年（1883）6月5日の火災によって全焼した。その後、昭和4年（1929）に遙拝所跡地へ神社再建の機運が高まり、昭和6年（1931）2月に県の許可を受けて建設をはじめ、市房山神宮里宮神社は昭和9年（1934）に完成した。

『湯前町史』によれば、神殿・幣殿・拝殿・社務所からなる総工費3万5千円（現在の貨幣価値で約1億円）の計画となっており、この費用は、湯前村（現湯前町）村費1万5千円や当時の球磨郡内全24町村からの寄付6千円と、氏子や篤志家（とくしか）らの寄付により賄われ、4月28日に落成式が行われた。



建設中の市房山神宮里宮神社



市房山神宮里宮神社（建設時）

現在は、湯前町内に氏子世帯が約 1,500 世帯おり、その中から現在の行政区割に基づく地区総代が約 55 名、さらに地区総代から 20 名が宮総代として活動している。



市房山神宮里宮神社（境内）



神社に隣接する現在の普門寺観音堂

（２）市房山神宮里宮神社から明導寺阿弥陀堂へ連なるまちなみ

市房山神宮里宮神社から、祭礼や伝統行事が行われる明導寺阿弥陀堂までには、鎌倉・江戸・明治など各時代の歴史的建造物が残されている。

① 下城～中里周辺

市房山神宮里宮神社参道の鳥居口から国道 219 号までの現県道幸野染田線は、“里宮通り”と呼ばれ、国道 219 号手前より西側に向かう町道桜町線は“桜町通り”として地域に親しまれている。

里宮通りのまちなみは、普門寺観音堂や旧市房山神宮遥拝所があったことから、門前町としての景観も有していた。



昭和 10 年頃の里宮通り



現在の里宮通り



現在の里宮通り（里宮神社方向より）



現在の桜町通り

市房山神宮里宮神社から下町橋を過ぎ、桜町通りにつながる町道下城線は、一部が九州自然歩道となっており、都川をはじめとする豊かな自然と、江戸中期の建造物である林酒造場や下町橋などの石橋、庚申塔をはじめとする多くの文化財が見られる。



下町橋と都川



町道下城線沿いに建つ庚申塔

下町橋は、通称“権現橋”と呼ばれる、橋長 17m の単一アーチ式石造橋であり、親柱の部分には、「明治三十九□・志多まちはし」とあることから、1906 年の竣工であることが分かる。

この橋の架橋に携わった石工については、江戸時代の八代郡に興り、通潤橋（つうじゅんきょう）や霊台橋（れいたいきょう）（ともに熊本県）、浅草橋（東京都）などを手掛けた種山石工（たねやまいしく）の流れを汲む人々であったといわれている。

また、下町橋の近くにある庚申塔は、銘により元禄 8 年（1695）のものであり、“古町結衆中敬白”の銘文も見られる。



町道下城線（林酒造場付近）



町道下城線（桜町通り付近）

市房山神宮里宮神社の位置する古城台地の裾野にあたる、古城区や下城区には明治時代の建造で現存する建造物が多く見られる。

特に樅木（もみのき）家住宅は、急勾配の屋根部分に、かつて茅葺屋根であった頃の特徴を残している。また、明治時代に建てられた旧柴田酒造場では平成 7 年（1995）まで球磨焼酎の醸造が行われており、廃業した現在でも外観は操業時のままであり、醸造所であった頃の雰囲気を感じさせる。



樅木家住宅



旧柴田酒造場

中心市街地である湯前駅本屋周辺から国道 219 号沿線は、道路の拡幅や改良事業により町割が変化したが、町道に入ると改良前のたたずまいが見られ、中里区には、明治期以前からの旧旅館などが残り、地藏堂も商店街のなかにひっそりと佇んでいる。



国道沿いに残る明治期の建造物



中里地藏堂

・湯前駅本屋

湯前駅は大正 13 年（1924）に開業した湯前線の駅舎として建てられた。

桁行約 19m、梁間約 4.5m で、ホーム側の屋根はそのまま葺き下ろされ庇（ひさし）状になる。背面には閉塞（へいそく）取扱所を張り出し、外壁は南京下見板張で、切妻の屋根を掛ける。



湯前駅本屋

内部は事務室と昭和 3 年（1928）に増築された待合室があり、出札口と送荷窓口を間仕切とする。柱にはかつてのレールを再利用した部分もあり、現在のレールと大きさの違いを比べることができる。

現在は、くま川鉄道の湯前駅となっているが、沿線で唯一戦前の姿を残しており、平成 26 年（2014）に国の登録有形文化財となった。駅前の広場は、里宮神社の春の大祭で行われる神輿巡行の最大の見せ場ともなっている。

② 上里～上村・下村周辺

上里区は、中里区から上村・下村周辺へ向かう途中にあたり、国の登録有形文化財である明導寺本堂が建っている。

・明導寺本堂

明導寺は、明治 14 年（1925）に熊本県下益城（しもましき）郡から町内染田区に移転建立された浄土真宗本願寺派の寺院であり、大正 12 年（1923）に寺域がせまいとの理由から、現在の上里区へ大正 15 年（1926）に移転している。

また、後述する明導寺阿弥陀堂は、この明導寺の飛地境内となっている。

明導寺本堂を設計したのは、当時の住職の長男、藤岡真月氏で、龍谷大学で学び、当初、西田哲学を学んでいたが、その後、独自に建築学も学んだといわれる。



明導寺本堂

基礎はコンクリートで腰をれんが積みとし、壁は南京下見坂張りの外壁にマンサード屋根（折れ曲がった屋根）を架けた、左右対称の外観となっている。

入り口は妻入りで正面玄関には切妻屋根を設け、軸組の間に煉瓦などを組み込むハーフティンバー様式を採用し、ゴシック風尖頭アーチの上げ下げ窓やガラス板をブラインドの様に配したルーパー窓も特徴的となっており、大正 12 年（1923）に起きた関東大震災の教訓から、耐震も考慮した設計であるといわれている。

こうした随所に洋風建築の技法を採り入れた特徴ある外観から、平成 10 年（1998）に国の登録有形文化財となった。

上里区から連なる上村・下村区は、もともと山間部の八勝寺阿弥陀堂周辺に暮らしていた人々が移り住んだ地域と考えられており、以前の中心地であったともいわれている。

集落内には、大師堂や薬師堂などの歴史ある堂宇が点在しており、現在公民分館が併設されている毘沙門堂は、里宮神社の神幸式に際し、神幸行列の御旅所となるため、湯前駅前とともに神輿担ぎの大きな見せ場である。

また、毘沙門堂（上村公民分館）の傍らに立つヒノキは、樹齢 400 年以上ともいわれ、「毘沙門の大檜」として町の天然記念物となっている。

下村区内の山北家住宅と旧永田医院（永田家住宅）は、共に明治 45 年（1912）の建造で、平成 27 年度（2015）に熊本県が行った近代和風建築調査の対象となっており、特に和洋折衷の外観が特徴的な旧永田医院は、天草の大工が施工に携わったといわれている。



下村大師堂



毘沙門堂と大檜



下村区内のまちなみ（右建物は山北家住宅）



旧永田医院(永田家住宅)

③ 上村・下村～馬場・瀬戸口周辺（旧東方村）

上村・下村区から連なり、本町の南部に位置する馬場区、瀬戸口区は、旧東方村の東方と呼ばれる集落であり、奥深い山林を背景に豊かな自然と田園風景が広がっている。

本町に所在する重要文化財 5 件(建造物 4 件、彫刻 1 件)すべてがこの 2 地区にあり、町内でも文化財の集中している地区で、特に明導寺阿弥陀堂は、現存する熊本県内最古の木造建築ともいわれており、九州でも富貴寺大堂（大分県豊後高田市）に次いで 2 番目に古いとされる。

また、室町時代の創建と伝えられる八勝寺阿弥陀堂も、中世の社寺建築様式を現代に伝える堂宇であり、背後の城跡(東方北城跡)などとともに、独特の景観を形成している。後に「相良三十三観音巡り」の項目で述べる宝陀寺観音堂も所在しており、この一帯で仏教文化が栄えていたことを示している。



明導寺阿弥陀堂 周辺



八勝寺阿弥陀堂 周辺

・明導寺阿弥陀堂（重要文化財）

明導寺阿弥陀堂は、堂内の木造阿弥陀如来及両脇侍像（重要文化財）の心棒に残る墨書銘から、鎌倉時代前期の寛喜元年（1229）頃に浄心によって建立されたことが分かっており、『球磨絵図』にもある通り、本来は「浄心寺」と号する。



明導寺阿弥陀堂

梁間・桁行ともに 3 間、寄棟造で屋根は茅葺。三手先の組物を配し、扉は正面 3 間が全て棧唐戸となっている。熊本県内で現存する最古の木造建築として知られている。

堂内の阿弥陀三尊像は、慶派の流れを汲む仏師の手により京都で造立されたといわれており、願主浄心と京都とのつながりをうかがわせる、当地を代表する鎌倉期の仏像である。

また、境内には七重・九重石塔（ともに重要文化財）が建ち、平成 3 年（1991）には十三重塔が住民たちの寄付によって復元されている。

・八勝寺阿弥陀堂（重要文化財）

馬場区に所在する八勝寺阿弥陀堂は、平成 3～4 年（1991～1992）の文化庁による「中世等文化遺産保護対策調査」で 15 世紀末頃の創建ということが分かっていた。平成 24 年度（2012）からの保存修理工事では、それまでの瓦葺から本来の茅葺に復原され、明導寺阿弥陀堂と同じ梁間・桁行 3 間で、正面の 1 間が棧唐戸（さんからど）となっている。

堂内の厨子は内部の墨書銘（ぼくしょめい）「作者 賀昨（がうん）」により、天正年間頃の作であることが分かっている。また、厨子の大きさと堂内の天井の形状などから、他の堂宇から持ち込まれたものであることが保存修理工事で明らかとなった。

八勝寺阿弥陀堂厨子の作者である賀昨については、この厨子をはじめ、町内では下里区にある御大師堂の厨子を手掛け、「頼賀（らいが）」の号でも球磨地域で活動した彫刻師であることが分かっている。



八勝寺阿弥陀堂（現在）



復原前の八勝寺阿弥陀堂

・馬場稲荷神社

馬場稲荷神社は、『湯前の地名と文化財』によると、はじめ八勝寺の鎮守天神の社地であったといわれ、元禄 10 年（1697）に拝殿が建て替えられている。

馬場稲荷神社の神事は、市房山神宮里宮神社の宮司が司る。5 月、11 月、3 月に例祭が行われ、11 月は初午祭となっている。ここでも後述する東方組太鼓踊りが舞われている。



馬場稲荷神社



馬場稲荷神社

(3) 市房山神宮里宮神社の祭礼

市房山神宮里宮神社で行われる祭礼として、現在は元旦祭り（1月1日）をはじめ、春祭り（旧暦3月16日）、夏祭り（7月20日）、秋祭り（11月15日）、大祓（おおはらえ）式（6月30日・12月30日）、月次祭り（毎月15日）が行われている。

① 春祭り

市房山神宮里宮神社の祭礼の中で、春祭りは神輿を担ぐ際の囃子である「どっこいどっこい」にちなみ「どっこい祭り」とも呼ばれ、ひろく地域住民に親しまれている。

春祭りは、正式には「五穀豊穰祈願祭」であり、本宮である市房山に、球磨地域の結婚したての夫婦や出会いを求める人びとが縁結びを祈願して詣でた「お嶽さん参り」が、毎年旧暦3月16日に行われていたことに由来した期日に行われている。

春祭りの最大の催しは「神幸式」であり、氏神を神輿に乗せ、担ぎ手たちが町内を練り歩く。この際に巡行する神輿は、昭和23年（1948）総代会において製作を決定したものであるが、当時は戦後の荒廃から立ち上がることを目的とした神輿の新調が全国的な動きとなっており、市房山神宮里宮神社の神輿もこうした流れを受けて製作されたと考えられる。



神輿の完成を祝い行われた稚児行列



昭和期の神輿

神輿の完成は戦後間もないという状況で、疲弊していた町にかつての活気を取り戻そうという総代や氏子らが約1時間20分をかけて町内を練り歩いていたが、神輿は300kgと大変重いものであった。

神輿の完成後数年は馬も引き連れた、たいそう賑やかな神輿行列であったが、当時の総代は高齢者が多く、戦後の復興に懸命であった若年層の担ぎ手不足も重なって、神輿の完成から3年後の昭和27年（1952）からは、荷車などによって巡行するようになったといわれている。

この間、昭和45年頃（1970）に、町内の球磨焼酎蔵元からの奉納を契機として子ども神輿が町内で引き回しが始まっており、昭和49年（1974）に、青年団が「町唯一の祭りを盛り上げよう」ということで再び人力による巡行を復活させているほか、昭和62年（1987）の秋祭りでは、「女神輿」も行われており、巡行の経路や形態に多少の変化は見られるものの、里宮神社を中心とした神輿の巡行は、春の一大行事として現在も受け継がれている。



昭和20年代の神輿行列



昭和50年代の神輿行列



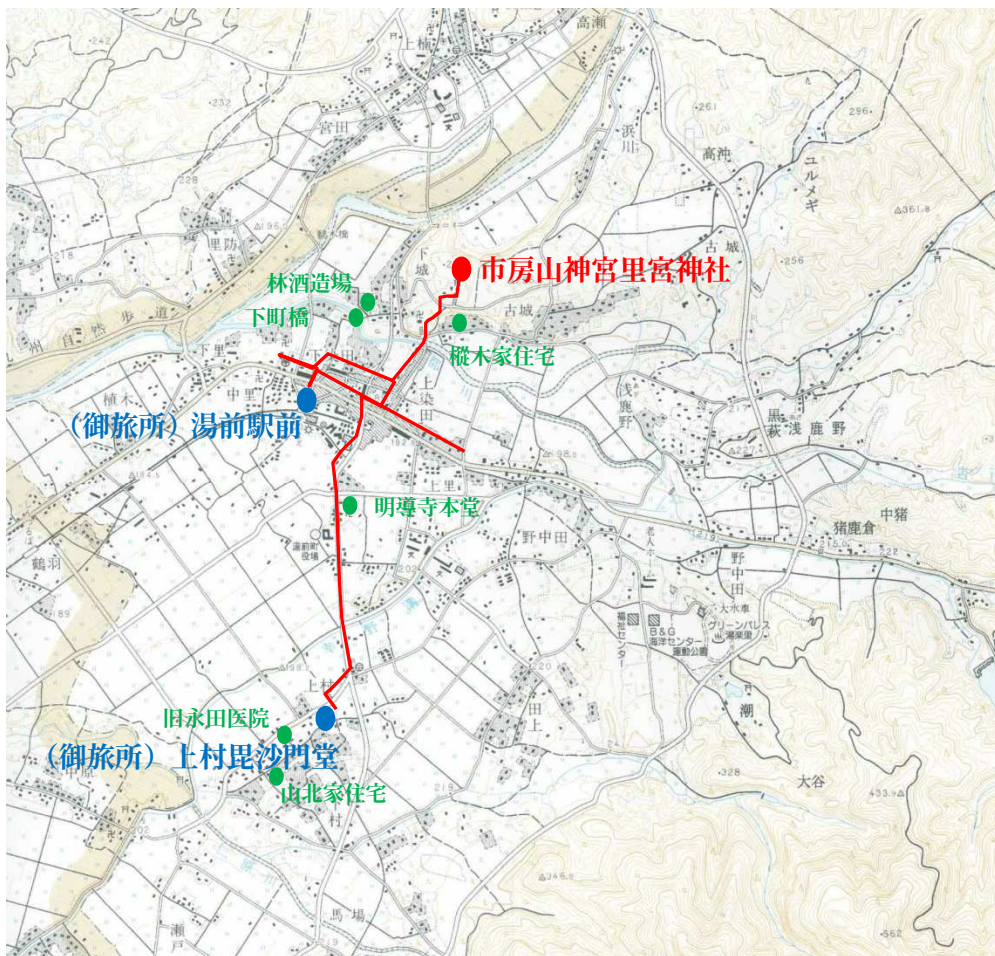
現在の神輿行列



子ども神輿

神輿の巡行経路は、下図のようになっており、祭の開催を知らせる爆竹の音とともに、若者達の「わっしょい、わっしょい・・・」の掛け声が町中に響き渡り、沿道の見学者から声援があると、神輿先頭の「さすぞ～」の掛け声に合わせて、神輿を回し声援に応える姿が祭を更に盛り上げ、御旅所では神主による祈祷神事が行われる。

市房山神宮里宮神社の春祭りで行われる神輿巡行の経路



② 秋祭り

秋祭りは、市房山神宮里宮神社の祭礼の中で、最も開催規模が大きく、毎年11月15日に行われ、春祭りと同じく昭和9年の里宮神社完成後から開催がなされており、昭和40年（1965）以降の『広報ゆのまえ』には、町の恒例行事としての記事が掲載され、時流に沿った祭の変遷が記録として残っている。

秋祭りは、神様にその年の収穫を感謝するお祭りでもあることから、正式には「五穀豊穰感謝祭」という。神社本庁から幣帛（へいはく）が贈られる「献幣式」が行われ、「球磨神楽」、「東方組太鼓踊り」、「浅鹿野棒踊り」といった伝統芸能が神前に集い、舞踊を奉納することから、町を挙げての祭礼行事となっており、特に神前での伝統芸能の奉納舞踊は人々を魅了するものとなっている。

・球磨神楽

人吉・球磨地方の神楽に関しては、相良氏の年代記である『歴代私鑑（れきだいしかん）』によれば、第12代相良為続が文明4年（1472）、雨乞祈願のため青井宮（現在の青井阿蘇神社）に神楽を奏させたところのが初出とされる。

雨乞や悪鬼退散、病氣平癒、諸願成就などを祈願する神楽がたびたび奉納されたことが記録に残る。また、現在の球磨神楽に直接結びつく史料としては、安永4年（1775）をはじめとする4冊の神楽書が残されている。

現在、球磨神楽は全33番のうち17番が残されており、主な活動は球磨神楽保存会を中心として行われている。10月8日の青井阿蘇神社祭礼（人吉市）の宵宮での奉納を皮切りに、球磨地域の各神社の祭礼で舞われ、12月15日、水上村の市房山神宮祭礼でその年の神楽奉納を締めくくる。

本町では市房山神宮里宮神社で、神社再建の昭和9年（1934）より宮司や氏子らにより舞われ、地元中学生への指導と伝承も行っており、11月15日の秋祭りでは「大幣（おおべい）」、「神師（かんすい）」、「田楽（でんがく）」の3番を、4人1組の3組で披露する。

市房山神宮里宮神社での、五穀豊穰感謝祭に関する球磨神楽の奉納は、球磨地域での奉納神楽の一つであると同時に、神社の祭礼行事としても重要な位置を占めるものである。



球磨神楽（市房山神宮里宮神社）



球磨神楽（市房山神宮里宮神社）

・東方組太鼓踊り

東方組太鼓踊りは、九州南部、特に熊本県や宮崎県に残る白太鼓踊りの一つとして本町に伝わるもので、白に似た大型の太鼓を叩いて踊ることから、総称して「白太鼓踊り」と呼ばれており、踊りの特徴としては、二手に分かれて白太鼓と鉦を交互に打ち鳴らすところにある。

また、熊本県側では、主に合戦用の兜を被って踊るのに対し、宮崎県側※は花飾りなどをのぼりに付けた「背負いもの」を付けて踊るなどの違いもみられる。

※ 宮崎県側の白太鼓踊りは、朝鮮出兵時に於ける加藤清正の虎退治に材をとったものが多いといわれている。

人吉球磨地域における白太鼓踊りの起源には諸説あり、永らくこの地域を統治した相良氏が武道鍛錬・士気鼓舞を目的として始めたとも、あるいは豊年祭の「十五夜踊り」が風流に発展したものともいわれている。

本町で古くより行われている東方組太鼓踊りは、源平合戦に材をとり、その唄は「東下り」の場面を表している。その起源は不明であるが、太鼓の胴部に「宝永」や「安政」の銘が残されており、宝永 2 年（1705）に後述する幸野溝が完成と同時に新田村の「東方村」が成立することから、東方村の成立と共にこの白太鼓踊りも興ったものと考えられる。

東方組太鼓踊りは、雨乞いの時にも踊られており、昭和 31（1956）年から 42 年（1967）にかけて九州では梅雨時期の降水量が平年より少なく（昭和 34 年と 37 年を除く）、特に明導寺阿弥陀堂の境内で踊られた昭和 33 年（1958）とその前後は年間を通して少雨であったという。

雨乞いを祈念しての踊りは、主に旧東方村に所在する明導寺阿弥陀堂や八勝寺阿弥陀堂、馬場稲荷神社で踊られていることが、保存会所有の写真で確認できる。

後継者問題に直面した昭和 30 年代後半からは青年団に、また、総合的な学習の時間が採用された平成 16 年からは中学生に踊りの指導と継承を行っている。これらは 8 月頃から行われることから、町の総氏神的存在である里宮神社の秋祭りにおける奉納舞踊を主にすえた活動となっている。



明導寺阿弥陀堂境内での奉納（昭和 33 年頃）



町内を練り歩く太鼓踊りの列

里宮神社への奉納舞の経路は、馬場公民分館を始点として八勝寺阿弥陀堂前を通過し、馬場区内の家々を歩き、下村と上村を通る。その後、幸野溝に沿って上里を北上し、上・下染田の「桜町通り」を過ぎた所で一の鳥居、二の鳥居をくぐり、拝殿前で奉納舞を行う。逆の順路で馬場区へ戻り、集落に帰着した後も、家々で「戻り打ち」として踊りが舞われる。

太鼓踊り唄

「音に聞えし判官は 東下りをなされるが その日のいでたち装束は いつよりすぐれて華やかに いとひおどし紐織の鎧ぐさ 日本の武士とはかくれなし 東下りはやや見事」

出典：『湯前の文化財』（藤本幸男氏作成資料より）



町内を練り歩く太鼓踊りの列



神社境内での太鼓踊り奉納

東方組太鼓踊りは代々、馬場地区の長男に口伝により継承されていたため、昭和後半に後継者不足の問題に直面したが、保存会を中心として青年団や中学生への指導と継承により、現在は中学生が秋祭りで踊りを奉納し、青年団は保存会とともに地域の祭事等に出演するなどしている。



神社境内での太鼓踊り奉納舞（平成）



神社境内での太鼓踊り奉納舞（平成）

東方組太鼓踊りはこうした次世代への継承や、他地域ではすでに行われなくなった民俗芸能の掘り起こしを意識した取り組みを核として、本町のみならず地域を代表する芸能としての大きな役割をも担っている。

・浅鹿野棒踊り

「浅鹿野棒踊り」は棒を持って踊る風流（ふりゅう）系の民俗芸能である「棒踊り」の一つで、起源は慶長年間の薩摩国にあるとされ、現在も熊本、鹿児島、宮崎の各県にひろく残っている。

通常棒の長さは六尺の場合が多く、これを互いに打ち合いながら踊りが行われ、棒踊りに用いる棒は、神霊の宿る聖なる用具の杖と同じ呪具（じゅぐ）としての性格をもち、これを振ったり打ち合わせることで悪霊を鎮めたり祓う効果があるとされている。

一方で、武術の一種である棒術との関連において、球磨地域に伝わる平家の落人伝説を背景に、大人と子どもが共に戦に備える事を踊りの主意とし、村落の青年の鍛錬（たんれん）と自衛の手段の意義とを兼ね備えているともいわれている。

『湯前の文化財』によると、浅鹿野棒踊りは、本町の浅鹿野地区を中心として踊られているもので、明治38年頃（1905）に林田芳太郎が、現在の多良木町久米前原で習い伝えたものが起源といわれている。

踊りの主意から、六尺棒を持つ大人4人、鎌を持つ子ども2人を1組とし、3組18人が三味線や太鼓、笛や唄に合わせて踊り、演目は「道あけ」、「鎌倉」、「次源次棒揃」、「太刀棒揃」、「帰り唄」が基本的な構成となっている。

棒踊り唄（太刀棒揃）

「さらばこれから口説いてみましょ 急げ急げと気をもむほどに 急ぎゃほ
どなくオクメの館 夜のことから門せきつめて 門がせかれればケツメも立たぬ
そこで貞七利発な人よ 裏にまわりて へいがき超えて 下女を頼んで ひと
間を忍ぶ ひと間忍べば次の間忍ぶ 次の間忍べば中の間忍ぶ 中の間忍べば
奥の間忍ぶ 奥の間忍べばヤヨの間忍ぶ ヤヨの間忍べば障子のござる 障子
ひとえをすかして見れば さてもきびしやオクメの寝間よ」

出典：『湯前の文化財』

基本的に口伝による継承であり、踊り手も浅鹿野区の長男に限定され、浅鹿野区の集落内で盛んに修練されているものであったが、昭和44年（1969）に東方組太鼓踊りと共に町の無形民俗文化財となったことをきっかけに、町の民俗芸能として里宮神社での奉納舞が行われるようになった。



神社境内での棒踊り奉納舞（昭和期）



神社境内での棒踊り奉納舞（平成）

平成に入り、浅鹿野区内の継承者のみでは踊り手が揃わない担い手不足の状況となったが、平成16年（2004）から、湯前中学校の総合的な学習の時間を利用して、伝統的な浅鹿野棒踊りの継承といった意味も含め、「浅鹿野棒踊り保存会」が中学生に棒踊りの指導を行っている。

踊り手が中学生だけとなった現在でも、市房山神宮里宮神社の裾野に位置する下城の一の鳥居を起点に60段の石段を登り、二の鳥居を通過した後、神社の拝殿前で舞うという経路で踊りが続けられている。

昭和44年（1969）の町文化財指定を機に衣裳も新調され、踊り手が中学生だけとなり、唄が短くなった点を除けば、唄に合わせて棒を打ち鳴らすという踊りの形や、経路など基本的な事柄は現在も変わっておらず、市房山神宮里宮神社の祭礼行事を通じて、浅鹿野棒踊りの伝承が図られているともいえる。

・おわりに

市房山神宮里宮神社は、市房山神宮の別当寺であった普門寺を起源にもち、湯前城跡への移転後も歴代の人吉藩主をはじめ、領民からもひろく信仰を集めてきた。

市房山神宮里宮神社で行われる祭礼では、祭儀と地域の民俗芸能が市房山神宮里宮神社を舞台として執り行われ、氏子や総代、宮司といった神社関係者と各民俗芸能の保存会や青年団、地域の子どもから大人まで、多世代にわたり、神社の内と外との区別なく一体となった活動が展開されている。

これらの活動は、神幸式や球磨神楽といった祭礼行事と東方組太鼓踊りなどの民俗芸能を軸に、明導寺阿弥陀堂や八勝寺阿弥陀堂といった域内の文化財を背景に、町を挙げて執り行われている。

こうした一連の活動により、春祭りをはじめとした祭礼行事では、町内を神輿が練り歩き、秋祭りでは神楽や白太鼓踊り、棒踊りといった伝統芸能が里宮神社に奉納され、市房山神宮里宮神社を中心とした祭礼、伝統行事は湯前町にとって欠かせない歴史的風致となっている。

